

Community 4 Children



地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン  
2014 年度年度事業報告書  
(2014 年 6 月 1 日～2015 年 5 月 31 日)



連絡先:一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン  
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号  
電話 06-6622-5645 /fax 06-6621-7139  
E-mail community\_4\_children@yahoo.co.jp

## はじめに

コミュニティ・4・チルドレン（以下、C4C）は、皆様の暖かいご支援によって 2014 年度の活動を実施することができましたので、ここにご報告いたします。

2014 年度は、タイでは、子どもたちの見守り体制を整えるため、コミュニティでの活動を充実させました。青少年の就労支援基金のための牛銀行プロジェクトもシステムを新たに作り再開する見込みも立ちました。

フィリピンでは、青年層のしょうがい者を対象とした自立生活支援プログラムを発展させると共に、小規模ですが小売業開業の支援をすることができました。

宮城県での「地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」では、県内での活動を発展・充実すると共に、新規に「災害時に要援護者を助ける災害食」開発プロジェクトに取り組みました。

カンボジア農村では、幸せな村づくりに取り組んでいる子ども会活動への助成を行いました。またカンボジアの連携団体と、タイの連携団体のスタッフとの出会いから、タイ国内で有機農業研修を実施することができました。

2015 年度は、タイ、フィリピン、日本、カンボジア、それぞれの取り組みが安定的に持続し、子どもたちの将来につながる成果が得られるよう継続的に支援していきます。また支援団体間の交流や研修も活発化したいと考えています。

今後も、国内外に広く目を向け、新たな支援先の開拓にも力を注いでいきます。



# 目次

はじめに	1
目次	2
2014 年度事業報告書	3
1. NGO 支援事業	3
1-1. 海外支援事業	3
A. タイ国カムクーンカムペーン財団支援事業	3
B. フィリピン国 JPCOM-CARES 支援事業	9
C. 海外プロジェクト助成事業	14
1-2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」	15
2. 視察・研修・ワークショップなど	23
3. パートナリシップ推進事業	26
4. 情報提供事業	28
5. 組織運営	28



# 2014 年度 コミュニティ・4・チルドレン (C4C) 事業報告書

## Community 4 Children

2014 年 6 月 1 日～2015 年 5 月 31 日

### 1. NGO 支援事業

#### 1-1. 海外支援事業

2014 年度は、タイ国カムクーンカムペーン財団とフィリピン国 JPCOM-CARES と連携し、同団体の運営・活動を支援しました。またカンボジアの NGO Khmer Community Development と協働で、ベトナム国境沿いのプレックチュレイ村の子ども会活動の支援も継続して行っています。

#### A. タイ国カムクーンカムペーン財団（以下、KK 財団）支援事業

東北地方コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノーンタカイ・ノーンメック村小・中学校を中心に、その周辺地域で子どもたちとともに活動し、子どもを見守るコミュニティづくりを支援しています。

##### 1. 奨学金

出稼ぎ、死別、離婚などの理由によって両親と日常的に暮らすことができず、更に生活困窮家庭の中・高校生（専門学校を含む）計 30 人に、年額 6500 バーツ（約 2 万 3 千円）の就学支援を行いました。

これまで支援の対象としていなかった小学生の中には、親や親族の家をたらい回しにされ、安心できる自分の居場所がない児童もいます。そして制服や文房具などの日用品を買うお金を保護者に求めることが難しく、物欲しさから中学校に入る前に盗みなどの非行に走るといった問題が発生しています。家庭環境、生活環境の問題解決のため、今後は家庭の事情に応じて、小学生にも支援することを検討しています。

##### 2. 地元文化の継承

子どもたちが急激に変動する社会で生きていくための支援活動として、自分たちのルーツである地元の文化を身に着けアイデンティティを確立していくこと、廃れゆく文化の継承者として地域の発展にも貢献していくことを取り入れています。

##### (1) 音楽活動

地元のコンケン大学芸術学部の学生の協力を得て、伝統舞踊と伝統楽器の演奏のレッスンを行っています。毎回、35 人程の子どもたちが参加し、男子は楽器演奏、女性は踊りを学びます。人前で話すことが不得意だった子どもたちも、伝統音楽や舞踊を通じて自信を持つようになり、自己表現、コミュニケーションの面で成長しています。



現在、多くのコミュニティでは、放課後や休日に子どもたちがシンナー、覚せい剤、マリファナなどのドラッグに手をだし、購入費を手に入れるために盗みを働き、結果鑑別所に送られたり、または喧嘩の末に死亡したりといった事故があいついでいます。実際、支援先のノーンメック村と隣村でも中学を中退し

た青年や子ども 14 人がシンナー所持・吸引で鑑別所に送られました。この音楽活動に参加している子どもの保護者は、週末、子どもを預けて、音楽の練習をすることが、子どもたちの身の安全にもつながると安堵しています。

### 演奏と踊りの練習日程

練習実施月	実施日数	参加人数(平均)	練習実施月	実施日数	参加人数(平均)
2014年6月	6日間	35	2014年12月	5日間	35
2014年7月	4日間	35	2015年1月	4日間	35
2014年8月	5日間	35	2015年2月	1日間	35
2014年9月	6日間	35	2015年3月	0日間	
2014年10月	7日間	36	2015年4月	0日間	
2014年11月	4日間	35	2014年5月	0日間	

## (2) コミュニティ文化の継承

### ◆仏日夕方の読経

地元の大人たちに子どもの活動をより深く理解してもらい、子どもたちの見守り活動を広げるために、コミュニティでの活動を増やしました。雨季（7月半ばから3か月間）は、雨安居と呼ばれる仏事の夕方の読経に子どもたちが参加しました。雨安居は、僧侶が寺院で修行に専念するもので、在家信者も月に4回（満月、半月、新月の日の一昼夜）を寺院で過ごします。

文化を継承するためには、小さい頃から村の年配者に付いて様々な作法を学ぶ必要があります。2013年度、子どもたちは、ノーンメック村の寺院で一生懸命読経し、年配者たちから賛辞を得たことから、今年度は、隣村にあるノータカイ村寺院で活動を行い、寺院に来た年配者たちは、仏教行事に親しむ子どもたちを暖かい目で見っていました。今後、コミュニティの中で年配者たちが子どもたちを見守るきっかけになると思われます。なお、この仏日夕方の読経活動は、昨年から、学校の道徳の授業として行っています。

### ◆草木染め

自然のものを暮らしに利用する方法を学び、工夫し日常生活に活かし、考える実践を続けています。

去年は伝統的な保存食の作り方とその料理方法を学び実践しました。今年は、村の中で採集した樹木、木の葉、果実などを使って、古着などの布を染色しました。かつて村の誰もが染物をしていましたが、現在では、このような自然資源の伝統的利用方法の一つが失われようとしています。自分の手で染色を体験した子どもたちは、自然の持つ可能性、有用性に感動していました。



実施日	場所	活動	参加者
2014年7月11日、19日、26日、8月3日、10日、18日、24日、9月1日、8日、16日、23日、10月1日、8日	ノーンタカイ村村落寺院	雨安居期の寺での読経参加	ノーンタカイ・ノーンメック村学校の小4から中3までの生徒、約30人
2015年3月10日	KK事務所	草木染	奨学生、約12名

### (3) 技術・知識の習得

#### ◆アクティブ英語

過去2年間、KKスタッフが試験的に児童向けの簡単な英語指導を行ってきました。その理由は、学校で勉強についていけず、やる気をなくした子どもたちのドロップアウト傾向が高まったためです。教師側にも問題があり、勉強についてこられない子どもを無視して授業を進め、適当に卒業させるため、中学を卒業しても、一般常識がなく、タイ語の読み書きさえできない子どもがいます。



英語の試験では0点を取る子どもたちでも、楽しく学び、勉強に関心を持ってもらうことを目的とし、2015年1月の正月休暇4日間、2月4日、7日、28日の計7日間、小学4年生から専門学校1年生までの生徒約10人に対して、スタッフが簡単な英語を教えました。学校の授業と異なり、楽しく学び、少し勉強に興味を持つようになりました。

#### ◆子ども会議

長期夏季休暇（4～5月）の前後（3月26日、5月7日）に、奨学生25人が集まり、自分や家族のこと、将来の進路について各々が語り合う場を開きました。今後のKK財団の活動方針をたてるためにも、子どもたちの発言や意見から現状を確認することができます。



夏季休暇後の集まりでは、休みの間に何をしていたかを話しました。その結果、休暇中、多くの者は親や親族と一緒に働いたり、手伝いをしていたことが明らかになりました。例えば、親と一緒に建築労働（100～300バーツ/日）、バンコクのレストラン（300バーツ/日）、お菓子作りをしている親戚宅に泊まり込みでの手伝い、プロの民謡音楽バンドの音響の手伝い（300バーツ/日）、サトウキビ畑や野菜の種づくりの手伝い、ピザ屋（38バーツ/時間）、出家などです。

子どもたちは、休暇中の経験を通じて、お金の重要性を知り、親が重労働をして自分を支えてくれていることを知ったそうです。子どもたちの多くは、自分の将来を考えるようになり、職業訓練や専門学校への進学を望むようになりました。職業訓練や専門学校は、学費もほとんどかからず、卒業後すぐに就職できることが選択の理由でもあります。KK財団では、子どもたちを常にケアでき現状を把握するために、子ども会議を継続していきます。

### ◆視察・研修

他団体の主催行事に参加し、有機農業や伝統技術を学び、他の地域の青少年と文化交流しました。また政府による社会福祉事業の拡大から、障がい児・者支援が青少年活動にも広がり、KK 財団も視覚障がい児との交流を行いました。



日時	参加イベント・研修	場所	参加人数
2014年8月22～24日	地域を愛する子どもキャンプ	サコンナコン県ブア村インペーン・センター	25人
9月9日	コンケン市青少年センター主催イベント	コンケン県コンケン市青少年センター	21人
10月14日	「心で写真をとる」研修	コンケン盲学校	7人
10月19-21日	カオ・チャマオ（学び場・遊び場）環境保護グループ20周年記念行事	ラヨン県子ども活動センター	23人
2015年2月19-21日	自然資源を学び保護する青少年キャンプ	カオヤイ国立公園	10人
3月15-17日	全国自然農法ネットワークイベント	チョンブリ県マープウアン郡有機農法センター	25人

### ◆精神修行（瞑想修行）

タイでは、仏教の教えが日常生活や人生の指針になっています。瞑想修行は、平常心を養い、様々な困難に立ち向かうための精神性を培うため、幅広い世代のタイ人が取り組みます。

特にコンケン県ウェルワン寺とその関連施設では、若者向けに瞑想修行コースを開催しています。寺院で戒律を守りながら集団生活をすることによって、日頃体験できない規律を学びます。瞑想コース経験者の子どもたちがメンターとして参加し、様々なところから来た子どもたちの世話をしました。寺院からも信頼され期待されています。



期間	場所	参加人数	備考
2014年10月19日	コンケン県ウェルワン寺院	30人	カティン儀礼参加・手伝い
2015年3月16-20日	コンケン県ウェルワン寺院	5人	5日間瞑想コース
3月25-29日	コンケン県ウェルワン寺院	9人	5日間瞑想コース
4月18-24日	コンケン県ウェルワン寺院	10人	12-15歳対象1週間瞑想コース
3月28日-5月3日	シンブリ県アムパワン寺院	1人	見習僧出家

### 3. 自然環境教育・保護事業（森を愛する子どもプロジェクト Dek Hak Khok）

#### (1) コミュニティ林学習

2014年8月12日、ノンメック村公共林で実施し、周辺4カ村の子ども30人、村人2人が参加しました。

自分たちの地域を愛し、自然環境を保護する意識を育てるため、村の長老に自然を利用する伝統的な方法を学んでいます。食料や薬として利用できる森の産物を知識と経験がある村人に教えてもらいながら、子どもたちが森の中を調査し、その結果をまとめました。



キノコについてまとめたポスターは、学校で発表し、掲示されています。干ばつがひどく、キノコもあまり生えていないと思っていましたが、33種類ものキノコが見つかり、自然の力に感銘を受けるとともに、人と森との関係、持続的森林保護の視点を学びました。伝統的な民間知識を子孫に伝えることは重要です。自分の地域を知り、愛するためにも今後も続けていきます。

#### (2) 植林

同日（8月12日）、村の長老や子どもの保護者、僧侶なども集まり、総勢50人で植林をしました。2011年に約1600㎡のノンメック村の公共地に植林した苗木は元気に育っていますが、一部干ばつにより苗木が枯れたため、追加植林し、肥料も加えました。



#### (3) 自然学習

9月27日、コンケン県カオスワンクワーン国立公園で、保護者と共にネイチャーゲームを行いました。参加者は50人（子ども、保護者、OB/OG、村の長老など）。保護者とこれまで支援してきた子どものOB/OGが中心になって、国立公園で自然の写真を撮り、草木で布を染める活動を行いました。

### 4. 保護者とのネットワークづくり（子どもを愛する人のネットワーク）

#### (1) 親子キャンプ

毎年タイの母の日である8月12日前後に開催しています。奨学生、保護者、OB/OG、KK財団スタッフと教師が参加し、子どもと保護者それぞれが、家族に対する気持ちや期待を述べるグループディスカッションを行いました。

KK財団の元奨学生で、教員試験に合格した者、レストランで働きながら簿記専門学校に通う者、元不良だが大学に編入して音楽の教師になりたいと願う先輩たちが、自分のこれまでの経験を伝えてくれました。子どもたちにとって自分の進路を考えるためにも役に立つ経験交流でした。

また今回のキャンプは、将来の青少年リーダーとなる素質を磨くために、大人たちは仕事を子どもたちに任せ、年長の子どもたちが自分たちで計画・実施しました。子どもの支援は、学校、家族やコミュニテ



ィとの協働作業であることを大人たちは確認し励まし合い、次の計画についても検討しました。今後も親子をサポートしていきます。

## (2) 家庭訪問

日曜日に保護者を集めて話し合うスタイルをやめ、KK 財団スタッフが各家庭を訪問し、時には夕食をともにしながら、子どもの行動などについて保護者と深く話し合いました。家庭訪問を通じて、子どもたちが置かれている家庭環境を把握することができ、普段、同居していても真剣に向き合うことがない子どもと保護者が進路などを一緒に話し合うきっかけにすることができました。

実施日	活動	場所	参加者人数
2014年8月9-11日	親子キャンプ	コンケン県カオスワンクワーン郡カオスワンクワーン国立公園	70人
2015年3月1-5日	子どもを愛する人のネットワーク・家庭訪問	コンケン県ノーンタカイ村ノーンメック村	20人

## 5. 牛銀行プロジェクト

出稼ぎによる若年層流出を止め、コミュニティの担い手を育てるために、牛を育てて得た利益で村の青少年の就労支援基金の設立を目指しています。

牛銀行プロジェクトは、2013年6月より、ノーンメック村において牧畜低利子融資として始まりました。C4Cで集めた寄付金177,400円を原資とし、雌牛2頭(2万5千バーツ/頭)を飼う資金を2世帯の家族に貸出し、3年後に利子をつけた2万8千バーツを返還してもらう計画でした。牛銀行を通じて、子どもの支援プロジェクトに対する認識が村人たちにも広がり、村での支援の輪を広がっています。



### 【成果と課題】

村外での活動を減らし、村内で行える活動を増やしました。活動当初から、子どもが健全に育つためには学校やコミュニティの人々の協力が重要だという共通認識を持ち、ノーンタカイ・ノーンメック村小中学校を中心に支援活動をしてきました。特にノーンメック村では、村長をはじめ大人たちが子どもの非行に心を痛め、協力して青少年を支援したいという意識が高く、放課後や休日に子どもたちが遊べるフットサルコートが村人たちの手で作った実績もあります。またノーンメック村では、行き場のない子どもたちや年配者の居場所を作る計画もあります。今後もこうした村人の動きと協調しながら、子どもたちの居場所づくりをノーンメック村で進めたいと考えています。

一方で、地元の学校と保護者の間に問題が発生しています。保護者たちが地元の教師の行為に不満を感じ、余裕がある家庭は他の地域の学校に子どもを通わせる状況が生れています。学校とコミュニティとの連携の再構築は大きな課題です。

## B. フィリピン国 JCom-CARES(フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町) 支援事業

JCom-CARES (ジェイピーコム ケアーズ) は、必要な公共サービスや社会資源の乏しい山岳部バギオ市とカバヤン町の2カ所を拠点に、しょうがいのある子どもや青年層が、地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

◆2014年度の利用登録者数(人) : 2014年6月～2015年5月の期間、下記の人数を対象に事業を行いました。

	継続	新規	計
バギオ市/STAC5	82	27	109
カバヤン町/ATC	130	0	130
計	212	27	239

### 1. リハビリテーション&保健プログラム

#### (1) リハビリテーションセンターでの「理学療法」、「作業療法」、「教育支援」

バギオ市にあるリハビリテーションセンター「STAC5 (Stimulation & Therapeutic Activity Center : スタックファイブ)」(以下STAC5)では、しょうがい児・者一人ひとりに必要な理学療法、作業療法と教育支援をスクリーニングし、必要な支援を行っています。月～金曜日、8時～17時まで開所し、一人の子どもに対して、1回約60～90分のリハビリテーションを週に2回提供しています。

◆リハビリテーションサービス提供数(回) :

理学療法	作業療法	特別教育支援	計
1,108	1,061	853	3,022

#### (2) 医薬品の支給

年間を通し、子どもたちや保護者、家族に対して、ビタミン剤・解熱鎮痛剤・風邪薬等、必要な医薬品を支給しました。

	子ども	保護者・家族	計
バギオ市	169人	26人	195人
カバヤン町	24人	27人	51人
計	193人	53人	246人

#### (3) 医療費等の一部支援

子どもたちのしょうがい把握やその特性を理解するためには、専門医による診断が重要です。STAC5での療育支援を開始する際には、専門医の診断書を元に、一人ひとりの支援計画を作成します。効果的な療育を行うためにも、3～6ヶ月ごとに受診をすすめ、子どもたちの発達や変化を繰り返し評価し、療育計画に反映しています。しかし、専門医による初回診察料は2,000～2,200ペソと非常に高く、経済的理由により必要な診療を受けられない子どももいます。STAC5では、28人の子どもたちに必要な医療を受けられるように、小児科医や専門医による診断、レントゲン検査、治療費、医薬品にかかる

費用の一部 24,180 ペソ（約 65,817 円）の支援を行いました。保護者の負担合計額は 4,500 ペソ（約 12,249 円）でした。

#### (4) 健康診断& 歯科・耳鼻科・眼科検診

健康上の問題が出てきても、経済的な理由から受診できない家庭が多い状態です。子どもたちのケアを行っている保護者や家族も自分の事を後回しにしてしまう場合もあります。10月21日、バギオ市の STAC5 にて、子どもと家族を対象とした無料の健康診断・相談、歯科・耳鼻科・眼科検診を行い、子ども 22 人、家族 25 人受診しました。各医師はボランティアとして協力し、医薬品は、バギオ市保健局、医療奉仕活動団体、南バギオ市ロータリークラブより寄付していただきました。



## 2. 教育支援

### (1) 奨学金

経済的に厳しい家庭の小学生から大学生まで 35 人の子どもたちに奨学金を支給しました。全員進級することができ、成績がクラスでトップとなった子もいます。交通機関の利用方法（ジプニーの乗り方）を理解し、一人で通学できるようになった子どもも出てきています。

	全額支給 (5,000~9,000 ペソ/年)			一部支給 (3,000 ペソ/年)			計
	小学生	高校生	大学生	小学生	高校生	大学生	
バギオ市	5 人	2 人	2 人	0 人	0 人	0 人	9 人
カバヤン町	7 人	3 人	0 人	13 人	3 人	0 人	26 人
計	12 人	5 人	2 人	13 人	3 人	0 人	35 人

### (2) 学用品の支給

バギオ市 16 人、カバヤン町 29 人、計 45 人の子どもに学用品の支給をおこないました。

## 3. 自立生活プログラム

### (1) プログラムの実施

青年へと成長している子どもたちが、将来、地域の中で、自分で、または家族や地域の方々とともに自立した生活ができるように、2012 年 10 月より「自立生活プログラム」を開始しました。

主に、芸術・音楽活動、家事技術・調理技術、身だしなみ・マナー、手工芸技術、裁縫・ミシン技術の習得に取り組んでいます。

自立生活プログラムは 3 年目に入り、これまで積み重ねてきた知識や技術の反復訓練に加えて、下表の新規プログラムを組み込みました。家事で使用する備品の扱い方に慣れ、主体性や積極性、参加意識の高まりが見られるようになってきました。長時間におよぶ講義でも、集中して座ることができ、会話や問いかけへの応答もできるようになりました。また、自身の気持ちも上手に表現できる者も出



てきました。その他に、プロジェクトの効果をモニタリングするために、家庭訪問も行いました。わが子が怪我をしてしまうのではといった危惧や不安、保護者自身の時間や余裕の無さから、せっかく身についた生活スキルなどを日常生活の中で活かす機会を子どもに与えていない状況がわかってきました。子どもをサポートしていくためにも保護者との連携強化が必要なのことがわかりました。

◆2014 年度実績

	登録者数	実施回数
バギオ市	13 人	24 回
ハッピーハロー村	7 人	36 回
カバヤン町	15 人	35 回
計	35 人	95 回



◆新規のプログラム内容

社会性・対人関係力・コミュニケーション力の向上	アイコンタクトの取り方 / 会話の始め方・終わり方 / ボディランゲージの理解と対応 / スキンシップの理解と方法 / 気持ちの伝え方・表現の方法 / 相手の気持ちに対する受け止め方・返し方 / 男女間の役割の違い / 男女間のリレーションシップ / 家族間のリレーションシップ / 自分自身・家族について知る
服薬管理	正しい服薬の方法 / 服薬時に必要な備品 / 薬の種類 / 薬の正しい保管の方法 / 薬の消費期限
応急手当	感電の予防方法（電気機器の取り扱い） / 応急手当に必要な備品 / 正しい傷の手当の仕方（切り傷・打撲） / シンナーの危険性への理解
交通マナー	交通ルールや道路標識の理解 / 危険・警告標識の理解

(2) 起業支援

自分のやってみたいことや起業アイデアを持つ青年層に対して起業支援を開始しました。村の雑貨屋でアイスキャンディを売り祖母を助けたいと考えていた Jobert さん（20 歳）と相談の上、商売を始めるために必要な備品を寄贈しました。平日は村の雑貨屋や小学校近くで売り、週末は地域行事の会場や教会前で販売を行った結果、寄贈後 3 ヶ月間で約 1,600 ペンを売り上げました。



4. ソーシャリゼーション&ネットワークづくり

子どもや保護者間、JPCOM-CARES と協働しプロジェクトに取り組んでいる団体等とのつながりを強化していくことを目的に次の行事をおこないました。

メンバーの多くは、村の外へ出かける機会がなかなかありません。STAC5 が行事を企画することで、様々な人との交流や出会いの機会となっています。また、子どもたちが習得したスキルを発表・発揮する機会ともなりました。介護や療育の大学・専門学校などの実習生、特別支援学校の教員もボランティアとして参加し、多様な人の関わり、社会とのつながりが得られました。



日付	場所	行事名	参加人数
9月12日	バギオ市	植林活動	35人
10月24日	バギオ市	リハビリテーションセンターSATC5 17周年記念行事	119人
12月17日	バギオ市	クリスマスパーティー	223人
1月10日	カバヤン町	新年の集い	82人
4月16日	バギオ市	温水治療	81人
4月27日	カバヤン町	リハビリテーションセンターATC 5周年記念行事	65人

## 5. 保護者のエンパワメント

### (1) 保護者の経済的な自立支援

カバヤン町では、保護者の経済的な自立支援のため「養豚プロジェクト」を行っています。カバヤン町の主な産業は第一次産業です。保護者の多くも農業で生計を立てていますが、その収入は天候や市場価格に左右され安定しない上、肥料や農薬価格の上昇から借金を抱えている家庭もあります。



養豚プロジェクトでは、小規模養豚を通じた副収入で上記のような家庭の経済的な安定を目指します。養豚を希望する家庭に対し、JPCoM-CARESの養豚場で生まれた仔豚を貸出し、市場で売れる豚になるまで（約5か月間）、各家庭で飼育してもらいます。豚の成育状況にもよりますが、一頭の販売価格の相場は15,000～16,000ペソです。販売し現金収入を得た後、仔豚代（3,200ペソ/頭）をJPCoM-CARESに返金してもらいます。各家庭で飼育した5か月分のエサ代（約5000ペソ）を差し引くと、保護者の手元には、6,800ペソ前後の現金が残ります。この金額は、カバヤン町の一般的な家庭の2か月分の収入に相当します。

2014年度は、13家族に仔豚を貸し出し、豚を売った収入を、子どもたちの教育費や食費に充てることができました。中には、自ら養豚ビジネスを始めようと仔豚を母豚にする保護者も出てきました。養豚場運営も軌道に乗り、保護者への貸し出し頭数が1回に2頭から3頭に増やすことができました。

また、保護者会が取り組むビーズアクセサリ販売、食品加工とその販売に対しても、材料等の購入費の支援を行いました。

### (2) 緊急支援

二人の子供他の保護者が亡くなったため、緊急時のサポートとして各1,000ペソを援助しました。

### (3) 家庭・学校訪問

主に、奨学生、自立生活プログラム参加者、養豚プロジェクト参加者を対象に、バギオ市で41回、カバヤン町では23回、計64回の家庭訪問・学校訪問を実施しました。

自立生活プログラム参加者の家庭訪問では、自宅の生活状況を把握し、家庭で身に付けたスキルをどのように実践しているのかのアセスメントを行いました。家庭や学校訪問を通じて、子ども自身や保護者教師が持つ課題を確認することができました。



## 6. 社会資源の活用

### (1) 外部資源の紹介・コーディネート

協力関係を持つ小児科医や神経科医等の受診のコーディネートを、バギオ市で 47 ケース、カバヤン町では 1 ケース、計 48 ケース行いました。また、口蓋裂の子ども手術代のスポンサー獲得のため、人道支援に取り組む現地 NPO とのコーディネートを行いました。

### (2) 物資支援のコーディネート

個人・団体から車椅子、整形外科靴や血糖測定器、古着等の多様な物品の寄付をいただき、バギオ市：137 人、カバヤン町：101 人、計 238 人に配布しました。

また、社会福祉法人那覇市社会福祉協議会様より、様々な福祉用具のご寄付をいただきました。持ち手が握りやすく首や柄が曲げられるスプーンやフォーク、持ち手の形や角度が変えられる包丁、バネ付きで軽く押すだけで切ることができるハサミや車椅子用ベルトなどで、リハビリテーションセンターや自立生活プログラムの中で使用しています。



## 7. アドボカシー&コミュニティ啓発活動

### (1) 地域行事への参画・創出

アドボカシー活動として、下表の行事に参加しました。また、コミュニティに対する啓発活動として STAC5 の「オープンハウス」や「ECO WALK」といった自主事業も実施しました。

オープンハウスでは、しょうがい児・者サポートの理念や事業内容を知ってもらうことを目的に実施し、各大学から多数の介護や看護、ソーシャルワークを学ぶ学生や学部の先生の来訪がありました。

「家族や社会との絆を深めよう」というテーマで、バギオ市内の公園を歩く「ECO WALK」を実施しました。しょうがい児・者やその家族は、地域社会の偏見や移動の問題、コミュニケーションなどのしょうがい特性等から、引きこもりがちです。「ECO WALK」では、しょうがいのある子どもたちやその家族も、当たり前豊かな自然を感じ、楽しむ権利があることを発信する機会と捉えています。ハッピーハロー村のお祭りでは、自立生活プログラムに参加する子どもたちが、歌やダンスの披露、アクセサリーの販売を行いました。これまで、しょうがいのある子どもや青年が、地域行事に参画する機会はありませんでしたが、住民の前で発表する機会を得て、しょうがい児・者も地域の一員であることを伝えることができました。



日付	場所	行事名	参加人数
7月25日	バギオ市	国際障害防止&リハビリテーション月間	102人
8月4日	バギオ市	白杖安全月間	9人
10月22日	バギオ市	STAC5のオープンハウス *JPCOM-CARES 自主行事	142人
2月6日	バギオ市	自閉症&ダウン症意識啓発ウォーク	64人
3月27日	バギオ市	ECO WALK *JPCOM-CARES 自主行事	47人
4月6日	ハッピーハロー村	ビデオ「The Miracle Worker」上映会	61人

		*行政との協働事業:様々なしょうがい者の人生について語られた内容のムービーを公民館にて実施。住民の方々が参加した。	
4月18日	ハッピーハロー村	村の祭りに参加	6人

## (2) 行政との連携

ハッピーハロー村では、村役場の2階で自立生活プログラムに取り組んでいます。この2年間、プログラムを行ってきた結果、村議会で活動を発表する機会を得ました。JPCOM-CARESの進める療育活動や自立生活プログラムの重要性を説明し、村議会メンバーの理解が得られました。行政や地域住民は、ハッピーハロー村での実践を徐々に認識するようになり、行政との協働事業「ビデオ上映会」や村のお祭りへの参画などを通じて、相互理解と連携が進んでいます。



### 【成果と課題】

自立生活プログラムが3年目に入り、子どもたちが反復・継続して訓練してきた成果が、技術やコミュニケーションから見てとれるようになりました。また、小規模ビジネスをスタートした青年が出てきたことは、自立生活に向け大きな一歩と言えます。

コミュニティ・ベースで活動するハッピーハロー村では、行政からの関心や理解を得て、協働事業を実施することができました。

今後の課題として、自立生活プログラムのさらなる充実と発展が必要であると考えます。特に、子どもたち一人ひとりのしょうがい特性や家庭環境に合わせたサポート方法、収入につながる技術習得プログラムの開発と実施です。現在は、アクセサリや鍋敷きづくり、裁縫などのプログラムを実施していますが、これらの商品は、生産性と販売効率が低いため一定した収入につながりにくく、また、手先を使う作業が難しいメンバーもいます。食品加工のような日常的に消費され回転が速い商品を生産する技術を習得できるようなプログラム、しょうがいに合わせた作業環境づくりなど、新たなチャレンジをして行く必要があります。現地スタッフと共に自立生活に必要なニーズを確認してプログラムを進めます。

## C. 海外プロジェクト助成事業

カンボジアのNGO Khmer Community Development (以下、KCD)が活動するベトナム国境のプレックチュレイ村の子ども会活動を支援しています。教育、経済、治安など様々な問題を抱えるカンボジアですが、子どもにとって一番大きな問題は、やはり教育です。近年、国際NGOだけでなくカンボジア政府も教育の重要性を唱え、識字率や就学率を上げようと様々な支援をしてきました。その結果、2013年UNICEFの統計では、カンボジアの識字率74%、小学校就学率は98%となりました。しかしながらプレックチュレイのように国境と接しているような辺境の村では、親の教育への無理解、経済的困窮などの理由から小学校に行けなかったり、中退しなければならず、就学児童全員が卒業まで学業を続けるわけではありません。また中学の就学率は全国でも40%を切り、高校・大学などの高等教育進学率は非常に限られてきます。プ

レックチュレイでは、一昨年初めてプノンペンの大学に行く学生を輩出しました。現在、高校に通っているのは9名（内女子7名）です。KCDは通学支援として、自転車を提供をしています。

プレックチュレイ村の子ども会の一番重要な活動は、「小さな先生による青空教室」です。地区の小・中学校教師は給与が低いうえ、人員不足、教育指導の質や意識の低さ、教材・設備の不足などの問題を抱えているため、子どもたちの教育に熱心とは言えません。そのため子ども会では、年長の子どもは小さな先生となって年少の子どもに木陰や人の家で初歩的なカンボジア語、英語、算数を教えています。ところが年少の子どもであっても、親と一緒に働かなければならず、中には国内外に出稼ぎに行くために学業を



あきらめる子どもたちも多くいます。小さな先生は家庭訪問を繰り返し、保護者や子どもに学ぶことの重要性を説明し、学校に戻ることを約束してくれる保護者も現れました。また教師と子ども・保護者との間にある不信感を改善するため、それぞれの意見を聞いて、関係を改善し就学率を上げようと地道に活動を続けています。この

ような子ども会の運営は、子ども会の話し合いで決められます。KCDは、子ども会メンバーに、子どもの権利、公衆衛生の知識、特に清潔な水の利用方法、デング熱など感染症予防の知識、家族問題などを研修し、子ども会が自らコミュニティの大人たちや年少者に伝えていく方法を模索しています。

カンボジアは、まだまだ子どもの基本的権利が守られていない国の一つです。今後も、子ども会の自主的な活動の支援方法を検討していきます。

## 1-2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域全体の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、C4Cは2014年度、宮城県内で取り組まれる児童・生徒・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、10歳の子どもの成人する期間をイメージして、10年スパンの学習ビジョンを持ちながら、福祉・防災学習を実施・検討・計画されている地元の社会福祉協議会、NPO、学校等と相談しながら、次のようなことに取り組みました。

### 1. 学習プログラム・ツールの研究開発 および事業の企画・実施への協力

自主事業として、「災害時に要援護者を助ける災害食」開発プロジェクト、「学びと暮らしへの安心感を高める防災学習」推進プロジェクトを実施したほか、福祉・防災学習のプログラムやツールの研究開発を行い、県内各地における事業の企画・実施をサポートしました。

#### (1) 自主事業：「災害時に要援護者を助ける災害食」開発プロジェクト

乳幼児、食物アレルギーのある子ども、高齢者といった「食に関する災害時要援護者」に焦点をあて、震災後の食生活に関するヒアリング・アンケート調査を実施。調査を実施した角田市・柴田町において、社会福祉協議会と、宮城学院女子大学・食品栄養学科の学生サークルFAS(Food and Smile!)とともに、実践を積み重ねてきました。



角田市では「梅・豆・米」の地元食材を使用した、地産地消の災害食メニューとレシピを考案。柴田町では多様な災害食のメニューを考え出すことのできるゲームを考案しました。どちらも、食育活動にも応用できる内容となっています。当事者の「自助力」、家族や周辺の方々の相互の「共助力」を高めることを目指し取り組みました。

◆2014/7/19「災害時レシピを考えよう～大切な人を守るために」（石巻に恋しちゃった）

主催：NPO法人石巻復興支援ネットワーク

協力：コミュニティ・4・チルドレン

会場：Café Butterfly♡（石巻市）

参加者：10人（石巻市内の親子3組）

内容：災害時レシピの考案・試食、食器づくり



◆2015/1/20「角田市の地産地消災害食レシピ試食会」

主催：コミュニティ・4・チルドレン

協力：角田市社会福祉協議会

会場：障害者就労支援施設のぎく

参加者：15人（角田市内のボランティア、栄養士、社協職員など）

内容：FASが開発した梅入りだまこ・みそ玉・ふりかけの試食



◆2015/3/12「角田市災害ボランティアセンター研修会」

主催：角田市社会福祉協議会

会場：角田市総合保健福祉センター

参加者：100人（角田市内の行政区長、民生委員児童委員、自主防災役員など）

内容：地域防災研修、C4Cによる災害食プロジェクト活動報告



◆2015/3/25「災害時にもみんなでおいしくごはんを食べよう！」

主催：コミュニティ・4・チルドレン

共催：宮城学院女子大学 学生サークルFAS

社会福祉法人 柴田町社会福祉協議会

会場：柴田町地域福祉センター

参加者：12人（町内外の小学生、町内の大学生・地域住民）

内容：防災食育ゲームの体験と調理実習



◆2015/3/30「災害時にもおいしく食べよう！角田の『め』」

主催：コミュニティ・4・チルドレン

共催：宮城学院女子大学 学生サークルFAS

社会福祉法人 角田市社会福祉協議会

会場：横倉児童館（角田市）

参加者：23人（町内の小学生、ボランティアなど）

内容：FASが開発した、角田の梅・豆・米を使った災害食メニューの調理と試食



## (2) 自主事業：「学びと暮らしへの安心感を高める防災学習」推進プロジェクト

宮城県内で防災学習を推進していくにあたり、特に沿岸部の学校や地域団体においては、「防災」と聞くと震災を思い出し恐怖感を抱いてしまう子どもたちがいるのではないかと、子どもたちにも安心して防災活動に取り組んでもらえるためにはどのように学習を進めていくといいか、といった声がきかれ、防災学習のプロセスにメンタルヘルスケアの視点を取り入れていくことも必要不可欠となっています。

そこで2014年度より、学習者も実践者も安心して防災学習に取り組み、この宮城で安心して暮らしていくことができるよう、メンタルヘルスケアの視点を取り入れた防災学習プログラムの企画・実施方法を考えるワーキンググループを立ち上げ、研究成果をリーフレットにまとめ、配布・活用するプロジェクトに取り組みます。

### ◆2015/4/10 ワーキンググループ立ち上げ準備会

アドバイザーの佐藤利憲先生(仙台青葉学院短期大学 看護学科 講師)、協力者の相澤治さん・東郷智恵美さん(NPO法人子どもグリーフサポートステーション)と、プロジェクトの方向性や今年度の実践内容について会議を開き、第一回目のワーキングに向けた準備を行いました。



### ◆2015/5/12 キックオフミーティング(第一回ワーキンググループ)

県内で防災学習やメンタルヘルスケアに取り組む、社協職員・行政職員・NPOスタッフなど12人が集まり、プロジェクトの趣旨説明を行うとともに、顔合わせ・互いの取り組みに関する情報交換を行いました。



## (3) 「ふくし」「ぼうさい」を知る・考える

福祉センターを探検したり、身の回りにあるものの福祉の工夫やすぐに取り組める防災活動の紹介などを学び、福祉や防災について考える機会をつくりました。

### ◆2014/7/29「角田市サマーボランティア体験(小学生編)」

主催：角田市社会福祉協議会

会場：角田市総合保健福祉センター

参加者：36人(市内の小学4～6年生)

内容：福祉センター探検、非常食体験

(C4Cは協力団体として参画)



### ◆2014/8/1「夏ボランティア体験学習～安心・安全探検隊」

主催：柴田町社会福祉協議会

会場：柴田町地域福祉センター

参加者：32人(町内の小学1～3年生)

内容：福祉センター探検(C4Cは協力団体として参画)



### ◆2014/10/9 福祉講演会「わたしとふくし～支援から思縁へ」

主催・会場：涌谷町立涌谷中学校

参加者：涌谷中学校3年生

講師：コミュニティ・4・チルドレン(菅原)

内容：福祉や防災について、中学生にできる活動の紹介

### ◆2014/11/6「防災講演会」

主催・会場：宮城県古川高校

参加者：古川高校1～2年生

講師：コミュニティ・4・チルドレン(栞原・菅原)

内容：防災について、高校生にできる活動の紹介

◆2014/11/28「福祉について」

主催・会場：岩沼市立岩沼南小学校

講師：コミュニティ・4・チルドレン（菅原）・岩沼市社会福祉協議会

参加者：岩沼南小学校5年生

内容：身近にあるものの福祉の工夫について



◆2014/12/9～10「五感を使って福祉を感じてみよう」

「コミュニケーションの大切さを知ろう」

主催・会場：岩沼市立岩沼南小学校

講師：コミュニティ・4・チルドレン（菅原）・岩沼市社会福祉協議会

参加者：岩沼南小学校5年生

内容：五感やコミュニケーションスキルを活用した体験学習



◆2015/1/21「聴覚障がいのあるかたの暮らしを知ろう」

「ボランティア活動について知ろう」

主催・会場：岩沼市立岩沼南小学校

講師：コミュニティ・4・チルドレン（菅原）・岩沼市社会福祉協議会

参加者：岩沼南小学校5年生

内容：岩沼市在住のゲストスピーカー2人からのおはなし



(4) ユニバーサルデザインについて考える

ユニバーサルデザインの理念や事例について学び、家の中にあるものや街中にあるユニバーサルデザインを探し発表しました。

◆2014/9/2, 16「ユニバーサルデザインについて」

主催・会場：岩沼市立岩沼西中学校

講師：コミュニティ・4・チルドレン（菅原）・岩沼市社会福祉協議会

参加者：岩沼西中学校1年生

内容：ユニバーサルデザインについての講義、身近なものや岩沼市内にあるユニバーサルデザインについて生徒からの発表

(5) ボランティア活動体験

平時や災害時において自分たちにできるボランティア活動を考え、体験しました。

◆2014/8/7～8「角田市サマーボランティア体験（中高生編）」

主催：角田市社会福祉協議会

会場：角田市総合保健福祉センター

参加者：41人（市内の中高生）

内容：福祉施設でのボランティア体験、災害ボランティア体験

（C4Cは協力団体として参画）



## (6) 東日本大震災をふりかえる

今後の地域防災に活かすために、震災当時の行動を地図上に落とし込んでいきました。

### ◆2014/8/4「夏ボランティア体験学習～被災地から学ぶ 3.11を忘れない」

主催：柴田町社会福祉協議会

会場：柴田町地域福祉センター、岩沼市総合福祉センター i プラザ

参加者：15人（町内の中高生）

内容：岩沼市視察、柴田町の震災後の生活のふりかえり

（C4Cは協力団体として参画）



### ◆2014/12/12「3.11ふりかえりマップづくり」

主催・会場：七ヶ浜町立向洋中学校

参加者：向洋中学校全校生

内容：震災後の避難場所や生活のふりかえり

（C4Cは協力団体として参画）



## (7) 防災レスキューゲーム

災害時に役立つさまざまな体験に、ポイントラリー形式で取り組みました。

### ◆2014/7/28「夏ボランティア体験学習～出動！子どもレスキュー隊」

主催：柴田町社会福祉協議会

会場：柴田町地域福祉センター

参加者：9人（町内の小学4～6年生）

内容：毛布担架づくり、応急処置体験、非常食体験など

（C4Cは協力団体として参画）



## (8) 水害版クロスロードゲーム

水害リスクの高い地域において、水害をテーマにしたクロスロードを作成・実施し、避難所生活を想定したワークを通じて自分にできる災害ボランティアを考えました。

### ◆2014/7/30 Jボラ体験隊「みんな de 防災クエスト」

主催：登米市社会福祉協議会

会場：平筒沼 youyou 館（登米市）

参加者：8人（市内の中高生）

内容：水害版クロスロード、避難所生活を考えるワーク、非常食体験

（C4Cは協力団体として参画）



## (9) 福祉・防災学習担い手育成

学校教職員、社会福祉協議会職員、団体職員、地域住民等を対象とした研修において、講義・ワーク・事例提供を行いました。

◆2014/6/9「石巻市福祉教育推進研修会」

主催：石巻市社会福祉協議会

会場：石巻市ささえあい総括センター

講師：コミュニティ・4・チルドレン（菅原）

参加者：60人（市内の学校教員、社協職員など）

内容：学校からの実践報告、C4Cからの講演・実践事例紹介



◆2014/8/12「福祉教育研修会」

主催：涌谷町社会福祉協議会

会場：涌谷町高齢者福祉複合施設ゆうらいふ

講師：コミュニティ・4・チルドレン（菅原）

参加者：18人（町内の幼稚園～中学校の教員）

内容：講演、学習ツール体験、情報交換会



◆2015/2/19「地域福祉フォーラム」

主催：登米市社会福祉協議会

会場：中田農村環境改善センター（登米市）

講師：一般社団法人 WellbeDesign 篠原辰二氏、コミュニティ・4・チルドレン（菅原）

参加者：106人（市内の行政区長、福祉活動推進員、地区委員、学校教員など）

内容：子どもを資源とした地域づくりについて、講義・事例紹介・情報交換会

## 2. 福祉・防災学習カフェの開催

福祉・防災学習の目的や意義を見つめなおし、先進的な取り組みを学びながら、実践者がつながり合い、それぞれの地域において福祉・防災学習に取り組むためのさらなる一歩を踏み出す機会を提供することを目的として、「福祉・防災学習カフェ」を企画。2014年度においては3回実施しました。

◆2014/7/10 「福祉・防災学習カフェ in いわぬま～学習プログラムの『作り方』を考えよう！」

主催：コミュニティ・4・チルドレン

共催：岩沼市社会福祉協議会

後援：宮城県社会福祉協議会

会場：岩沼市総合福祉センター i プラザ

参加者：26人（社協職員、民生委員、大学生など）

内容：代表理事栗原による基調講演、  
学習プログラムの作り方を考えるワーク、情報交換



◆2015/3/4 「福祉・防災学習カフェ in せんだい

～福祉・防災学習の実践における情報通信ツールの活用を考える」

主催：コミュニティ・4・チルドレン

後援：宮城県社会福祉協議会

会場：KKRホテル仙台

参加者：20人（社協職員、団体職員、大学生など）



内容：独立行政法人防災科学技術研究所・七ヶ浜町社会福祉協議会をゲストに、実践事例提供、活用体験、情報交換

◆2015/3/22 「福祉・防災学習カフェ in なは～災害時にも、みんなでおいしくごはんを食べよう！」

主催：コミュニティ・4・チルドレン

協力：NPO法人まちなか研究所わくわく

会場：沖縄県総合福祉センター

参加者：30人（社協職員や団体職員とその子ども）

内容：防災食育ゲームの体験、調理と試食



### 3. 調査・研究活動

「宮城県内の福祉・防災学習におけるeコミ利活用手法の展開支援業務」

2014年12月～2015年3月、独立行政法人防災科学技術研究所からの業務委託を受け、福祉・防災学習を実践する社会福祉協議会や教育機関を対象に、独立行政法人防災科学技術研究所が開発し各地域にて展開しているeコミュニティ・プラットフォームの利活用手法の展開可能性の有無とその内容の調査・整理を行いました。

### 4. 県内外への情報発信

県内外の方々に対し、宮城における福祉・防災学習の取り組み状況を発信する機会として、下記の企画や研修会において事例報告や講師をつとめました。

2014/8/31 第3回国連防災世界会議仙台開催実行委員会・仙台市主催 第三回国連防災世界会議半年前フォーラム「復興・防災の活動とまちづくり—伝える防災、感じる防災」において実践事例報告

2014/10/4 日野ボランティア・ネットワーク（鳥取県日野町）主催 鳥取県西部地震から14年フォーラム「子どもを守る・子どもと創る～母子・子どもと地域の防災・福祉活動を考える～」において実践事例報告

2014/11/1 NPO法人わかやまNPOセンター主催 「地域一体で取り組む福祉・防災学習～住民一人ひとりの命と暮らしを守ることでできる地域を目指して～」において実践事例報告

2014/11/14 北海道名寄市社会福祉協議会主催 「もしもに備えた調理実習～生活を支える関係づくり～」において講師対応

2014/11/14 北海道名寄市社会福祉協議会主催 「生活の変化に対応した食生活」において実践事例報告

2014/11/15-16 北海道士別市社会福祉協議会主催 「士別市中学生・高校生ワークキャンプ」において講師対応

2015/3/15 第三回国連防災世界会議 パブリック・フォーラムテーマ館「市民協働と防災」において実践事例報告・活動紹介資料展示→活動紹介リーフレットを作成、今後も活用予定

## 5. 会議への出席、研修・フォーラム・学会への参加

県内外で開催された各種会議・研修等に出席し、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

- 2014/8/11 宮城県社会福祉協議会主催 「福祉教育推進セミナー」に参加
- 2014/11/3 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」10周年記念事業実行委員会・ひょうご安全の日推進県民会議主催 「1.17 防災未来賞 ぼうさい甲子園10周年記念フォーラム」に参加(兵庫県神戸市)
- 2014/11/8-9 日本福祉教育・ボランティア学習学会 第20回とうきょう大会実行委員会主催 「日本福祉教育・ボランティア学習学会 第20回とうきょう大会」に参加
- 2014/11/21 仙南二市七町 福祉教育情報交換会に参加(宮城県柴田町)
- 2015/1/5 東北大学災害科学国際研究所主催 「防災教育に関する情報交流セミナー」に参加
- 2015/1/26 「第四回ジョイント5 防災・安全活動会議」に出席(宮城県七ヶ浜町)
- 2015/2/8 みやぎこころのデザイン教育実行委員会主催「こころの健康を学ぶワークショップ研修会」参加→サポーターとして登録、実行委員会に参画
- 2015/3/8 仙台青葉学院短期大学 佐藤研究室主催「震災を体験した子どものこころサポート研修」に参加

## 6. 事業視察

県内で実施された福祉・防災学習にかかわる事業等において、視察を行いました。

- 2014/6/5 色麻町立色麻小学校 防災訓練
- 2014/7/16 気仙沼市教育委員会「防災主幹研修会」
- 2014/12/18 角田市社会福祉協議会「理事・評議員研修」
- 2014/12/25 川崎町社会福祉協議会「冬休み福祉体験」
- 2015/2/17 柴田町社会福祉協議会「大規模災害に備える研修会」

## 7. 情報交換・相談対応

下記団体を訪問・面談し、福祉・防災学習の推進にかかわる情報交換や相談対応に取り組みました。  
(順不同)

**県内：**宮城県社会福祉協議会、気仙沼市社会福祉協議会、登米市社会福祉協議会、大崎市社会福祉協議会、涌谷町社会福祉協議会、色麻町社会福祉協議会、女川町社会福祉協議会、石巻市社会福祉協議会、利府町社会福祉協議会、七ヶ浜町社会福祉協議会、岩沼市社会福祉協議会、柴田町社会福祉協議会、角田市社会福祉協議会、川崎町社会福祉協議会、石巻市立和瀨小学校、宮城学院女子大学リエゾン・アクションセンター、宮城県共同募金会、宮城県障害者福祉センター、みやぎ生活協同組合、NPO法人子どもグリーンサポートステーション、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会気仙沼事務所、一般社団法人みやぎ福祉・防災情報化機構

県外：福島県社会福祉協議会、会津若松市社会福祉協議会（福島県）、相馬市社会福祉協議会（福島県）、公益社団法人中越防災安全推進機構（新潟県長岡市）、独立行政法人防災科学技術研究所（茨城県つくば市）、神戸学院大学（兵庫県神戸市）

### 【成果と課題】

2014年度は、C4Cみやぎとして初めて助成金や委託金を活用した事業に取り組めたことで、実践や連携・協働の幅を更に広げ、活動の意義を深めることのできた一年でした。

◆「災害時に要援護者を助ける災害食」開発プロジェクト（真如苑助成事業）では、主に3市町で事業を実施。福祉・防災学習を「食」という切り口から見つめなおすことで、東日本大震災の経験を振り返ったり、福祉・防災学習の新たな可能性を見出したりすることができました。また、それらをもとに、新たな学習プログラムや学習ツールを生み出すことができました。大学生の専門性を活かした関わりや、社会福祉協議会を通じた地域資源や地域住民の関わりによって、新たな連携・協働の形を作ることができ、担い手の輪が広がりました。

◆福祉・防災学習カフェは、県外を含む3か所で実施。1回目（宮城県岩沼市）は「学習プログラムのつくりかたを考える」という根本的なテーマを設定し、2回目（宮城県仙台市）3回目（沖縄県那覇市）はそれぞれ「IT」「食」といったテーマ設定のもと開催しました。社会福祉協議会職員、NPOスタッフ、民生委員、大学生といった、多様な担い手が集まり、顔の見える関係づくりや情報を交わすことのできる場となりました。今年度は上記のようにテーマを設定し開催したことで、より具体的な情報流通・スキルアップの場をつくることができました。

◆県内各地の実践団体との連携においては、2014年度は新たに4市町の社会福祉協議会からお声掛けいただき、ともに実践に取り組むことができました。また、以前から連携して取り組んできた団体とも、プロセスを大事にし、より深く議論を重ねながら事業に取り組むことができるようになりました。県外の実践団体とも連携して事業に取り組んだり情報交換をすることで、宮城で取り組んでいく上でのヒントを様々な角度から得ることができました。

◆国連防災世界会議への出展にあわせてリーフレットを作成。活動展示ブースにおいて、4日間で200部を配布しました。福祉・防災学習のねらいや実践事例を伝えるため、今後も改訂を重ねながら活用していく予定です。

## 2. 視察・研修・ワークショップなど

### 2-1. スタディ・ツアー

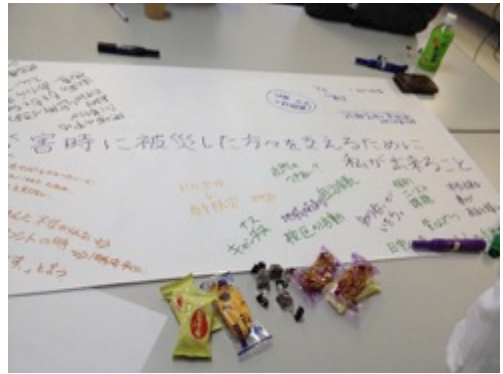
2014年11月18～23日、NTT労働組合関西総支部の国際ボランティア活動「東北タイ農村でのスタディ・ツアー実施の調整を行いました。執行委員長を含め総勢14名が、KK財団の活動地域であるノンメック村でホームステイし、稲刈りなどの農作業を手伝いながら、村人の自立や子供の就労問題に対して、組合としてできることを検討していただきました。現地でのふり返し、帰国後の統括会議を経て現地を支援するワークキャンプの実施について計画を立てていくことを確認できましたので、今後村との調整行います。





## 2-2. 国内 I Do Café (あい・どう・かふえ) 事業

12 回目の I Do Café を 2014 年 11 月 1 日 (土) 14:00~17:00 に、県民交流プラザ和歌山ビッグ愛で開催しました。参加者は、社協職員を中心に、NPO、大学生、教師の方々に総勢 14 人。特定非営利活動法人わかやま NPO センター主催、近畿ろうきん地域共生推進部共催で開催することができました。



第一部は「災害時のスペシャルニーズがある人を助け、救う」と題し、広島土砂災害の在宅避難者支援を行った(特活)み・らいず事務局長岩本恭典さんと大崎将弘さん、東日本大震災の避難所の要援護者支援を行った介護福祉士の小窪紀枝さんに報告していただきました。

第二部では、「災害時に被災した方々を支えるために、私ができること」と題し、参加者それぞれの I Do をカフェ形式でディスカッションしました。南海大地震が起これば甚大なる被害を受ける和歌山県では、防災・減災に力を入れており、参加者の意識も高くとても密度の濃い時間となりました。

2014 年度は、I Do Café を 1 回しか開催することができませんでした。事業の位置づけと今後の展開を検討する必要があります。

## 2-3. 招聘・視察・研修事業

### (1) ペットボトルで作る蚊取り器ワークショップ

2014 年 9 月 5~9 日 於カンボジア国プレックチュレイ村 ワーク実施者: 栗原代表理事、加藤理事、トゥック (タイ KK 財団スタッフ)

C4C が KCD を通じて支援するプレックチュレイ村は、毎年雨期になると洪水に見舞われ、9 月末まで田畑が冠水します。このような時期には、大量に発生する蚊を媒介とした Dengue 熱のような感染症によって命を落とす子どもがいます。蚊を媒介とした病気の問題は深刻で、プレックチュレイの子ども会でも毎年 Dengue 熱撲滅キャンペーンを行っています。そこで身近な材料で簡単にで



きる蚊取り器を子どもたちと一緒に作ることによって、蚊に刺される機会を減らし感染症の予防に役立つとともに、子どもに自分や家族の健康を考えるきっかけになることを期待して実施しました。

40 人以上の就学前および小学校低学年の子どもたちが集まり、ワークショップは盛況に終わりましたが、材料として使うペットボトルは日本のように普及しておらず、使用済みのペットは購入しなければなりません。しかしながら、子どもたちにとって、このような活動は数少ない経験であり、娯

楽の機会ともなりました。今後も子どもたちが楽しみ、役にも立つワークを継続していきたいと考えます。

また、このカンボジア訪問は、タイ KK 財団スタッフのトゥックの研修としても実施しました。彼女は初めて訪問したカンボジアの村の環境にもなじみ、現地のスタッフとの交流は、下記の有機農法研修として実を結びました。

## (2) タイ国カンボジア人有機農法研修

2015年1月12～16日 於タイ国ブリラム県サトゥック郡  
有機農業研修センター 参加者：KCD スタッフカンボジア人  
4名、カナダ人1名、KK 財団スタッフ（トゥック）、栗原  
代表理事、加藤理事

9月にKK財団スタッフ・トゥックがカンボジアを訪問した際、KCDスタッフと、タイと共通する様々な野菜や薬草について話したことがきっかけとなり、タイでの有機農業研修が実現しました。



日程	活動	宿泊
1月12日	カンボジア人チームがタイ入国	セーンチャン村有機農業研修センター
1月13日	セーンチャン村有機農業研修センター所長パイラットさんによる研修：EMを利用した堆肥づくり、果樹の挿し木、省エネかまど等	同上
1月14日	サイさん宅で有機農業生産物の加工研修：有機米を利用したワッフルづくり	同上
1月15日	サイさんの農場、薬草林見学、村の婦人グループによる水草から作る手工芸品のデモンストレーション	サイさん夫婦宅
1月16日	カンボジア人チーム帰国	

セーンチャン村有機農業研修センター所長パイラットさんは、元教師の有機農法家で、15年ほど前から国王や行政からの受託を受けて青少年、農民などに有機農業研修をしています。彼はできる限り地域内で手に入る材料を使い、低コスト・高収益を実現することで農民の貧困問題を解決すると共に環境を保全しようと考え、EM菌、無農薬堆肥などを使って多様な動植物を育てています。

サイさんも同じく元教師の有機農法家で、毎年雨期になると水があふれる川のそばに農地を持っています。田んぼの中に土を盛り、その周りに様々な樹木を植え、合鴨を育てることで農薬の使用を最小限にする農業を営んでいます。彼は、薬草師でもあり、自分で育てた薬草林を持ち、民間薬を作っています。

スタッフでもあり農民でもあるKCDのローカルスタッフ（カンボジア人）は、研修で得られる技能や考え方を持ち帰ろうと、草や木の種類、堆肥の作り方、炭焼きなどについて熱心に学びました。短期間でしたが、とても密度の濃い研修になりました。今後もこうした経験交流の機会を提供していきます。

## 2-4. C4C 設立 3 年記念シンポジウム「子どもたちの未来（あす）を話そう！」



2014 年 7 月 12 日 13:00～16:30 於阿倍野市民学習センター  
＜シンポジスト＞田辺克之さん（神戸フリースクール）、川口裕之さん（NPO 法人 Kid's ぽけっと）、由本雅則さん（㈱阪急阪神百貨店）、栗原英文（C4C）、＜コーディネーター＞浜田進士さん（子どもの人権ファシリテーター、子どもの権利条約総合研究所関西事務所、児童自立援助ホーム「あらんの家」）＜参加者＞29 人

C4C が法人として設立して 3 年がたち、気持ちを新たにするためにも、子どもたちとの寄り添い活動を長年続ける方に集まっていたいただき、リレートークとバズセッション「子どもと大人のイイ関係を作るために大切なことは？」「子どものいのちを守るコミュニティを作るヒントは？」を参加者とともに行いました。ディスカッションでは、「寄り添う」ことや子どもを理解することの意味、第三者だからできること、多様な家族の姿など、深い議論が盛んになされて充実した会となりました。C4C としても、このシンポジウムを機会に、子どもを地域で育てる重要性を再認識し、今後も様々な人々と連携しながらプロジェクトを進めていきます。

## 3. パートナーシップ推進事業

### 3-1. 調査事業

#### （1）宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査

調査実施者：菅原清香会員

宮城県および周辺県において福祉・防災学習推進事業の実施主体を訪問し、ヒアリング調査・研究、事業実施に関する意見交換等を行いました。特に、2014 年 12 月～2015 年 3 月、福祉・防災学習を実践する社会福祉協議会や教育機関を対象に、独立行政法人防災科学技術研究所が開発し、各地域にて展開している e コミュニティ・プラットフォームについて、福祉・防災学習分野における利活用手法の展開の可能性の有無とその内容の調査・整理を行いました。また、県内で開催された各種会議・研修に出席し、情報交換・ネットワーク構築に取り組みました。

#### （2）フィリピン事業調整・自立生活プログラム調査

2015 年 2 月 25～3 月 2 日 実施者：栗原代表理事

訪問先：JPCOM-CARES, 国際協力機構フィリピン事務所

現在 JPCOM-CARES で行われている自立生活プログラムおよび就労支援を発展させるために、視察・調査並びに意見交換をしました。JPCOM-CARES では、自立生活プログラムを 3 か年毎にステップアップさせる計画で、個々人の生活機能の変化、向上を図るアセスメントシートによる個別計画をもとに確実にプログラムを進めています。

また自立生活プログラムについては、ビーズ作品づくりを中心とする手工芸作品の種類も増えます。今後の課題は、販売ルートの確保と製品の質向上で確認できました。

この期間中に、JICA マニラの事務所を訪問しました。フィリピンでの事業の中に社会福祉関係のプロジェクトがいくつかあり、フィリピン国内での状況について情報交換を行いました。パナイ島を中心とするしょうがい者支援担当の JOCV 隊員のバギオおよびカバヤン町での視察研修の依頼を受けました。

### (3) フィリピンの自立生活プログラム向上に向けた宮城県内の社会福祉事業所・施設の視察

2015 年 4 月 15～19 日 訪問先：角田市社協就労支援施設のぎく、山元町工房地球村、利府町障害者地域活動支援センター、宮城県障害者福祉センター・身体障害者福祉協会、工房つる、SVA シャンティ、NPO はまわらず、本吉絆つながりたい。実施者：栗原代表理事、加藤理事、山田理事、菅原清香会員  
C4C では、フィリピンでの自立生活および就労支援プログラムをより発展させるための研修が必要と考えています。つながりのある宮城県内で研修先となる**社会福祉事業所・施設**を視察しました。精神しょうがい者就労支援 B 型作業所、アート系の会社とのコラボレーションによる商品開発と販売、地域の人々もまじえた障がい者との交流の場、藍染工房、被災後の子どもたちの子育て支援、しょうがい児の親の会など、様々な特徴のあるところを訪れ、情報を集めました。今後は、JPCoM-CARES スタッフと今後検討し、研修計画を具体化させていく予定です。

### (4) フィリピン事業調整・自立生活プログラム調査

2015 年 5 月 16～22 日 実施者：栗原代表理事、山田理事、他同行者 JICA コミュニティ開発隊員 2 名。

フィリピンの自立生活プログラムの進行状況を調査すると共に、日本の宮城県で訪問した研修先候補の情報を JPCoM-CARES スタッフと共有しました。これまで行ってきた自立生活プログラムの成果として、ハッピーハロー村では、一人の青年がアイスクャンディーの製造・販売を起業しました。他にもスナック、鍋敷きなど製造・販売を希望するメンバーがいます。

日本での研修先候補の検討では、宮城県内の事業所がアート系会社とのコラボレーションによって商品開発をしていることに高い関心を持ち、STAC5 を利用する子どもたちの絵などを製品化できないかとの意見が寄せられました。全体としては、どのようにして自立生活プログラムで制作した物品の商品価値を高め、販路開拓を行うのかに焦点が集まりました。話し合われたことを参考に、助成金を申請しつつ研修計画を立てていく予定です。

## 4. 情報提供事業

### 4-1. ホームページ、ブログ、facebook による情報発信

2014年6月～2015年5月末の間に、1,413人（前年度比：204人増）の方に訪問いただき、4,650（前年度比：229増）のプレビューがありました。団体名からの検索が一番多く、「C4Cみやぎ」や「スタディ・ツアー」といったキーワードでの検索が増えています。

★ホームページ：<http://www.community4children.com>

★ブログ：<http://ameblo.jp/community4children/>

### 4-2. イベント参加

◆ワン・ワールド・フェスティバル 2015年2月7日（土）～8日（日）10時～17時 於 関テレ扇町スクエア・北区民センター・扇町公園

「ワン・ワールド・フェスティバル」に活動紹介ブースを出店しました。

◆こうべ音屋祭 2015年3月28日 12:00～19:00 於 上屋劇場

神戸フリースクール25周年記念・こうべ音楽祭に活動紹介ブースを出展しました。



## 5. 組織運営

◆2014年度会員について

会員数比較 （2015年5月31日現在）

	2013年度（人）	2014年度（人）
正会員（個人）	16	14
正会員（団体）	0	1
賛助会員（個人）	9	8
賛助会員（団体）	2	0
使途指定寄付（タイ牛銀行）	0	2
使途指定寄付（タイ・奨学金）	0	1
使途指定寄付（フィリピン）	1	1
一般寄付	8	11

正会員総数増減は認められません。団体運営を活性化するために、I Do Café やスタディ・ツアーなどの会員活動を活発にし、会員数を増やすとともに、これまでの支援者との交流を密にし、会員を継続していただけるように努めます。